

さすがに、初めての行為なのでスムーズに刺激するというわけにはいかない。とはいえ、愛液とスperlマの混合液が陰茎についているおかげで、皮膚がぬめつていい具合に滑ってくれる。

「んっ……んはっ、んはっ……どう、光樹くん？　はあ……はあ……気持ちいい？」
吐息のような声をもらしながら問いかけると、

「あ……ああ……すごく、いいよ……」

うわずつた声で、光樹が答える。

それを聞いて、あずさは胸を寄せている両手に力をこめると、さらにペニスへの愛撫に熱をこめた。

（あっ……オチン×ンが……また硬くなってきた……すごい。どんどん大きく硬くなって……わたしの胸で、光樹くんが感じてくれてるんだ）

と思うと、全身に悦びが駆けめぐる。

いつの間にか、ペニスは元通りの硬さを取り戻し、光樹も自ら小刻みに腰を振りはじめていた。

谷間からの摩擦が大きくなり、少女の身体中にも心地よさがひろがっていく。

「ううっ、あずさ……俺、もう大丈夫そうだ。それ以上されたら、また出ちゃうかも

しれないよ」

少年の訴えを聞いて、あずさはようやくパイズリの手をとめた。

「それじゃあ、あずさ。もういいね？」

「うん……来て、光樹くん」

とうなずくと、光樹が脚の間に入ってきて、復活した勃起を割れ目にあてがった。少年の腰にグッと力が入り、ペニスがクレヴァスのなかに進入をはじめた。

「あつ……んぐううううっ！」

一瞬、亀頭の先端が膜に当たる感触があった。しかし、光樹は一気にそこを突き破って奥へと入ってくる。

「あぐっ！ ああああつ……った……んぐううううっ！」

一瞬、秘部からの激痛が全身を駆け抜けたが、あずさは声を出すのをどうにかこらえた。特に、光樹に気を使わせるのがイヤなので、「痛い」という言葉だけは必死に呑みこんで我慢する。

硬いモノが膣道をかき分けながら、ズブズブと内部への進入をつづける。

間もなく、少年の一物が子宮口に当たるのが感じられた。

（ああ、入ってる……光樹くんが、わたしのなかに……）



少女の目から、自然に涙が溢れてきた。

「あずさ、痛い？」

心配そうに、光樹が聞いてくる。

「ううん、違うの。ちよっと痛いけど、これは違うの……」

確かに処女喪失の痛みはあるが、幼い頃からずっと想いを寄せてきた少年とようやく結ばれた喜びのほうが、大きくうわまわっている。

ただ、そのことを口にするのはなんとなく恥ずかしくて、言葉にできない。

「動いても平気？」

「うん、いいよ。光樹くんの好きにして」

少女の許可を得た光樹が、ゆっくりと腰を動かしはじめる。しかし、やはり気を使っているのだろう、突く動作だけを重視したピストン運動だ。

「うっ……あっ……奥う……ああ、わかる……あんっ、光樹くんのが……んあっ、当たってるのお」

膣の奥を突かれる初めての感覚に、あずさは痛みとは違うものを感じていた。

指での自慰しか知らない少女にとって、身体の奥の奥を貫かれるこの感覚はまったく未知のものだ。しかし、肉棒が膣内で動くたびに、大好きな少年と一つになってい

る悦びが湧きあがってくる。

痛みはまだ残っているものの、その奥でペニスの先端が子宮口に当たるたびに発生する鮮烈な感覚のほうが、遙かに強く少女の肉体を駆けめぐっていた。

「ああっ、こんなのって……あんっ、あんっ……こんなの……は、初めてえ！ ああんっ、もつと、もつと突いて、光樹い！」

あずさは、いつの間にか少年に抱きつき、快感を求めている。

光樹の動きが、徐々に大きく荒々しくなっていく。だが、少女はそれをしっかりと受けとめた。

破れたばかりの処女膜の痛みも、ほとんど気にならない。それどころか、痛みすら快感にすり替わってしまった気がする。

初体験のときはもつと痛くて苦しいと思っていたが、自分でもこれは予想外だ。もつとも、痛くないに越したことはないし、気持ちいいのはむしろ歓迎するべきことだろう。

少女は、いつしか光樹の動きに合わせて、自分から腰を揺すっていた。正常位なので、そんなに大きく動けはしないが、それでも自ら動くことで快感が増し、ペニスの感触もよりはつきりする。